

ラテン語教典の読法と仏典の訓読¹

ジョン・ホイットマン (John Whitman)

国立国語研究所／コーネル大学

1. はじめに

一般的に、文字体系の借用過程は次の(1)のように捉えることができる。

- (1) i. 言語 A と言語 B の二重言語話者が言語 A の読者にもなる。
- ii. その二重言語話者たちが A の文字を借用して B を表記する。
- iii. B の話者たちが(ii)で成立した表記体系を更に B の特徴に合わせることで、B の文字体系ができあがる。

例えば、朝鮮半島の文字体系史を対象とする研究には(1)のような記述がよく見られる。概ね次のような記述である。(i) 高句麗、百濟、新羅が国家として成立する前から、半島諸言語の話者が中国の文字に接触し、漢字の使用者(読者)になると同時に、半島にいた漢人が半島諸言語に接触した。次に、(ii) 半島の人々が漢字を以て半島諸言語を表記するようになった。これが韓国の研究者がいう「借字表記法」に当たるが、これは「固有名詞表記法」と「郷札」に区別される。² 最後に、吏讀の成立が(iii)に対応する。我々に残された吏讀資料のほとんどが新羅語を記したものである。その創造は、7～8世紀初の薛聰による業績だと伝統的に伝えられているが、真実は定かではない。

文字体系の借用と自言語を記す表記法の成立は、筆記言語の「自言語化」(vernacularization) という過程を代表する現象であると言える。近頃、漢字文化圏における「自言語化」を仏教の普及に関連づける研究は少なくない(Mair 1994、金 2010、Kornizcki 2014)。金(2010)とKornicki(2014)の研究では、仏教典の読法に着目して、東アジアにおける漢文訓読と仏教の伝来を関連づけている。本稿では、「典礼言語を自言語で読む」ことを一般的な現象として位置づけることを目指す。中世欧州におけるラテン語教典の注釈資料を通して、典礼言語に書かれた文字資料を自言語で読む現象は東アジアに限られた現象ではないという可能性を示す。最後に、8世紀に起きた、華嚴経の日本への伝来と日本における訓点法の成立の関係を検討する。

2. 「国際語」と「自言語」

¹この研究は韓国学中央研究院の補助金(MEST) (AKS-2011-AAA-2103)の援助を受け行ったものである。同研究院に謝す。

²(1)で仮定される段階では、郷札はむしろ吏讀と共に(2iii)に分類されるべきだと考えられるが、韓国の先行研究では固有名詞表記法と一緒に分類されることが多い。

話を朝鮮半島の文字史に戻そう。(1)は15世紀までの朝鮮半島の文字史によく当てはまっているように見えるが、(1)だけでは説明できない現象が、朝鮮半島の場合に限らず、幅広く文字借用の過程に観察される。それは、以前から使われていた共通語が(1ii)、(1iii)の段階でも継続して使用され、場合によっては(1ii)や(1iii)で成立した表記言語と新たに入れ替わる現象である。このような現象が、紀元後の南アジアにおけるサンスクリット語の使用拡大に見られることが、米国コロンビア大学南アジア文化史の専門家シェルドン・ポロック(Sheldon Pollock)により指摘されている。紀元前後までは、南アジアにおける金石文などの文字資料は中世インド語の諸方言(プラクリット prakrit)に限られ、ブラーフミー系統の文字でサンスクリット語が記されている記録はないが、紀元前後から、サンスクリット語の筆記言語としての使用が急速に増え、紀元後の10世紀の間、プラクリットの文字資料は少なく、表記言語としてのサンスクリットが支配的であった(Pollock 1998)。つまり、書き言葉として一旦成立したプラクリットとサンスクリット語が入れ替わったのである。ポロックはこの場合のサンスクリット語を「世界言語」または「国際語」(cosmopolitan language)と呼び、それに対立するプラクリットを「土着言語」または「自言語」(vernacular language)と呼んでいる。³⁴南アジアの場合、表記言語として(1iii)の段階まで達した自言語と、世界(国際)表記言語であるサンスクリット語が入り替わったのである。

より「国際語」に近い表記体系がより「自言語」に近い表記体系と入れ替わる現象は、朝鮮半島の文字史にも見られる。郷札が「三国遺史」以後記録されていないことや、吏讀の使用範囲が新羅時代から李朝まで拡大されなかったことなどがその例であるが、国際語である漢文の維持力をもっとも明確に示す歴史的事実は順讀口訣の定着である。韓国の口訣資料は日本の訓点資料と同じく、漢文の原典を自言語で読むために(つまり訓読するために)、原典に自言語の読みを示す符号を加えた資料である。このような符号のうち、自言語読み(訓読み)を記すのに使われる「字吐」(字豆)という漢字の略体字が日本訓点資料の片仮名に対応する。「逆讀點」が訓点資料の返読点に対応し、「點吐」がヲコト点に対応する。高麗時代末期(13世紀)までの口訣資料は、いわゆる釋讀口訣がほとんどである。釋讀口訣は日本でいう訓読と同じく、原典の語句を音(朝鮮漢字音読み)か訓(韓国語読み)にしなから、韓国語の語順で読み下す読法を示すものである。13世紀から支配的になった順讀口訣は、原典を読み下さず、句・節の語順と読みを原典のままにして、節レベルの文法単位を韓国語の助詞や接

³Vernacular language の定訳は「土着言語」であろうが、韓国の学者정소연(2011)「自言語」と表現している。本稿では「国際語」と対比させて「自言語」と呼ぶことにする。

⁴ポロックの表現 cosmopolitan language と vernacular language では筆記言語と口頭言語の区別が明確にされていないことは大きな問題点である。厳密にいうと、郷札や吏讀は「自国筆記言語」といい、釋讀口訣は自国口頭言語(もしくはそれに近いもの)というべきであるが、こちらでは筆記言語と口頭言語の違いをいちいち明記しない。

続詞でつなげる読法を示すものである。^{5, 6} 順讀口訣に対応する読法（自言語読み）は日本の訓読には見当たらないが、庄垣内（2012）が紹介したウイグル語による仏典の漢文訓読とある程度の類似性がある。

釋讀口訣がより自言語に近いとすれば、順讀口訣のほうがより国際語である漢文に近いといえるが、後者が前者に取って代わった。つまり、国際語に近い表記法(又は読法)が自言語に近いものと入れ替わったのである。この変化にはいろいろな説明がなされている。南豊鉉（2009: 124）は、「漢文を理解する水準が高まるにつれて[順讀口訣が]発達した」ほかに、「科挙試験で製述科が重視され経典の解釈より製述(作文)を重視する傾向があらわれ、漢文の暗誦を重視するようになり、このような読法が発達したと見られる」などの要因を指摘している。これらの要因はいずれも漢文・漢字文化の影響力の強化、国際語である漢文への接近を示唆するものである。

いわゆる「近代化モデル」では、自言語、つまり国家・民族別の標準言語・標準文字体系への発達は単方向の過程として捉えられる。ポロックは、こうした「近代化モデル」を批判し、逆の方向、つまり筆記言語としての自言語を離れ国際語を取り入れる傾向が、歴史を通して複数の地域にわたって繰り返されていると主張している。15世紀までの朝鮮半島における文字史はその一例として挙げられるだろう。ポロックは、ポストコロニアルの現在における世界化（globalization）と古代・中世・近世における世界言語への接近を対比しながら、その根本的な類似性を指摘している（Pollock 2003: 26-29）。

ポロックの記述は興味深いが、筆者は言語学者としてポロックの主張に対して以下の二つの疑問を抱いている。一点目は、ポロックの東アジアの言語・文字史の捉え方である。ポロック(2006)は東アジアの「自言語化」（vernacularization）を次のように記述し、実際の自言語化は東アジアでは近代まで起きなかったという。⁷

Contrast, for example, the wide sphere of Chinese literary communication, where the vernacular transformation in places like Vietnam or Korea occurred so late as to appear to be the project of a derivative modernization.

「[南アジアと欧州を]幅広い中国文学交流圏と比べてみると、ベトナムや韓国といった場所における自言語化は派生的近代化の結果と考えらるほど遅れて行われた。」(2000:595)。

続いて、

⁵鄭在永(2005, 2006)では「順讀口訣」を「音讀口訣」と呼んでいる。ただし、音で読む原典の節を韓国の助詞や接続詞でつなげることを音読と言っているのであり、日本における音読とは異なる。

⁶釋讀口訣から順讀口訣への発展については、南豊鉉（2009: 125-9）を参照。この2種類の口訣の違いは、金文京（2010: 99-104）が日本の訓読法と対照しながら簡潔に説明している。

⁷東アジアにおける自言語化をポロックがどのように捉えているかについては King (2007)を参照。

Sejong's demotic reforms in Korea in the mid-fifteenth century, and the development of *chu-nom* script in Vietnam around the same time, did not produce anything remotely comparable to what we find in fifteenth-century southern Asia or western Europe. Instead, the innovations in both Korea and Vietnam appear to have been largely instruments designed for the promulgation of neo-Confucianism.

「世宗大王による 15 世紀半ばの言語改革や、同じ頃ベトナムで行われた字喃の発達は 15 世紀の南アジアとヨーロッパで見られるものとは到底比べられない。むしろ、韓国とベトナムで見られる改革は主に朱子学を公布する道具に過ぎなかったようである。」(2000:595, 注 6)。

とポロックが東アジアにおける「自言語化」の遅れを記述している。ここで何より注意しなければならないのは、ポロックは「自言語化」を論じるとき、複数の要素を一括して捉えていることである。次の(2)で述べる要素が、文字体系を借用する「自言語話者」が有する選択事項である。

- (2) i. 文字体系の選択
- ii. 表記言語の選択
- iii. 読み下す言語の選択

近世までの東アジア(朝鮮/韓国、満州(女真)、モンゴル、ベトナム)において(2i)の選択が「漢字」であったことはポロックの述べる通りである。つまり、文字体系においては漢字が選ばれたのである。しかし(2i)の選択によって(2ii-iii)が決まるわけではない。たとえば「蒙古秘史」の著者は(2i)の選択においては「漢字」を選んだが、(2ii-iii)の選択はいずれも「モンゴル語」であった。釋讀口訣や日本の訓点資料では(2i-ii)までの選択は「漢字・漢語」であるが、(2iii)の選択は「自言語」であった。ポロックのような研究では、この3つの要素が混同され、「世界言語」(国際語)か「自言語」かの選択が過剰に単純化される傾向がある。これが本稿の1つの主張である。

もう1つの主張は、言語・文字使用上、(2)のような複数の選択肢があることは、漢字文化圏に限らず、国際語・自言語が対立する場合、常に見られるということである。権威のある「世界言語」(国際語)とある一地域に限られる自言語の関係を理解する上で「注釈文献」(glossed texts)は中心的な概念である。注釈文献(口訣資料、訓点資料)の存在によって古代韓国と日本の漢字使用者が多くの場合に自言語で漢文文献を読み下したことがわかる。ラテン語が国際語(世界言語)の役割を果たした中世欧州に注釈文献が数多く残されていること

はよく知られているが、本稿ではその現象を紹介し、東アジアにおける口訣資料と訓点資料と比較する。

本稿の構成は次のようである。まず第3節では中世欧州における注釈文献はどのような形のものであったのか、どこまで口訣資料や訓点資料の比較対象になるかを検討する。次に第4節では口訣資料と訓点資料に立ち返り、その類似点と差異点およびその歴史的関係を検討する。第4節では cosmopolitan 「国際語」と vernacular 「自言語」の概念を簡潔に再検討する。

3. 中世欧州の注釈文献と「読書」の口頭性

3.1 中世欧州の注釈文献

ラテン語の原典に自言語(中世欧州諸語)で記された注釈資料は、19世紀から本格的に研究され始めた。注釈資料が豊富に残されているのは特に古アイルランド語 (Stokes 1887)、古ドイツ語 (Steinmeyer & Sievers 1879-1922)、そして古英語 (Sweet 1885) である。古アイルランド語の場合には注釈文献が最古の言語資料であり、8世紀に遡る。古アイルランド語の資料はヴェルツブルク、ザンクト・ガレン、トリノ、ミラノ、カールスルーエ、ウィーンなど、ローマ正教の僧院がある各地に保存されている。これは、当時はアイルランド人のキリスト教僧侶がヨーロッパ各地の僧院で修行していたためであろう。これらの資料に見られる「Würzburg(er) Glosses/Glossen」のような「地名+gloss(es)/glossen」という示し方は、日本の訓点研究でいう「XX点」(例えば「東大寺点」)と比較が可能である。

古アイルランド語、古ドイツ語、古英語などに注釈資料が多いことは、ロマンス系言語の話者と比べて、ゲルマン系やケルト系言語の話者にとって、当時の「国際語」であったラテン語は読んだり理解するのが困難だったためであろう。これは、漢語と異系統である日本語や韓国語の母語話者が漢文を読む場合と比較できる。中世欧州の注釈資料を機能別に分類した研究が複数あるが、こちらではウィランド (Wieland 1983) の分類を紹介し、口訣資料と訓点資料にもっとも近似するものと対応させる。

(3) ウィランド(1983)によるラテン語注釈の分類

機能	英語名	訓点・口訣資料との対応
(a) 韻律注釈	Prosodic gloss	声点
(b) 語彙注釈	Lexical glosses	漢語による語彙注釈
(c) 文法注釈	Grammatical glosses	[]
(d) 統語注釈	Syntactical glosses	語順点(返読点、漢数字点など)
(e) 解説注釈	Commentary glosses	原典の内容を説明する注釈

韻律注釈は鋭アクセント記号(´)と似たしるしを用いて、語調(ストレス)を示す。そのほかに、分音符として使われる場合もある。語彙注釈は原典の語彙の意味を加注当時の話者にわ

かりやすい単語で説明する注釈である。原典の行上に記される場合が多い。同義語による注釈(例: (原文) aestus 「火」 (注釈) calor 「熱」)のほかに、反意語による注釈は、東洋の注釈資料で見られるものと同じく非定形+反意語で示すものが多い(例: (原文) credat 「信」 (注釈) non dubitet 「不疑」)。ウィランドがいう文法注釈は原文の単語の文法格や品詞を示すもので、訓点資料や口訣資料には直接に対応するものはない。

訓点資料や口訣資料を比較する観点から考えて、統語注釈(syntactical glosses)がもっとも注目に値する。Wieland (1983) が調査した資料には、ローマ字、ローマ数字、点、点と線の組み合わせからなる4種類の統語注釈が観察されている。ローマ数字を使った注釈の例としては、次の例では点注とともにローマ数字を使っている。

...
 (4) Quattuor ergo simul repetens ter computat omnem

VI VII VI VII V

Quam duodenarius circumtulit ordo figuram. (Arator 87 v14f)

点注とローマ数字が少ない順に並べ直すと(5)の語順になる(Wieland 1983:103)。

(5) Computat [ter repetens quattuor] ergo simul omnem

数える 3 かけて 4 従って同時 全体の

figuram quam circumtulit duodenarius ordo.

図を[関係詞] 包含する 12 の 順位

「3 と 4 をかければしたがって同時に(使徒の)12 くらいの順位を包含する全体図を算出する」

ウィランドは、(5)の語順を並べ替える目的は、古英語の語順を反映させるか、ラテン語の文法構造を分かりやすくするかのいずれかであったという。しかし、11世紀の古英語の母語話者はなぜラテン語の読書においてラテン語の語順を古英語の語順に置き換えたのであろうか。次の章では、この問題を検討する。

3.2 古英語の統語注釈資料

古英語(アングロサクソン語)の統語注釈資料を調査した画期的な研究としてロビンソン Robinson (1973)が挙げられる。ロビンソンは古英語に記された、ラテン語原典への注釈資料には複数の統語注釈体系に着目している。その中には、ローマ字(a b c ...), 点、点と線の組み合わせ、括弧、コンマなどの符号がある。その一例であるケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・カレッジ蔵ボエティウス Boethius 著『哲学の慰め』De consolatione philosophiaeには、語彙注釈とともに統語注釈も見られる。次の(6)がその1行である。太文字で記した部分

は原文のラテン語で、その上(原典行上)がアングロサクソン語の語彙注釈、その上(統語注釈)である(Robinson 1973: 448)。

(6)	b	d		c		e		g		a		f		h
	eall		manna		cynn		on eorþum		gelicum		arist		fram upspringe	
	Omne		hominum		genus		in terris		simili		surgit		ab ortu	

全て 人間 類 に 地球 同じ 起き上がった より 起源
アングロサクソン語の語彙注釈をアルファベット順に並べ直すと、(7)のように普通の古英語文になる(Robinson 1973: 448-9)。(7)の3行目は現代英語である。

(7)	a		b		c		d		e		f		g		h
	Arist		eall		cynn		manna		on eorþum		fram		gelicum		upspringe
	Arose		all		kind		of men		on earth		from		alike		upspringings
	起き上がった		全て		類		人間		に地球		より		同じ		起源
	「地球に全ての人類は同じ起源より起き上った」														

定動詞で始まる(7)の古英語の語順はラテン語としては異常であるが、古英語の存在構文にはよく見られる語順である。

ロビンソンの研究以降、上で見たような統語注釈について諸説がある。すでに 50 年代に Draak (1957) は、ラテン語原典に加えられた古アイランド語の統語注釈が古アイランド語が母語の若い僧侶の教育のためのものであった可能性をと指摘した。ロビンソン自身は、ラテン語の原典に統語注釈を加えアングロサクソン語で読む習わしは、教育道具とか説教手段というより「文法解釈の精巧なシステム」(elaborate systems of grammatical commentary)だったと言う。これに対して、Korhammer(1980)は統語注釈が「自言語読み」のために使われたという説を否定した。Korhammer は古英語の統語注釈資料のほかに、ヨーロッパ大陸の数 10 点の資料を調査した結果、「自言語読み説」に対して次の問題点をあげた。

- (8) 「自言語読み説」の問題点 (Korhammer 1980)
- a. 統語注釈記号がアングロ・サクソン語として不自然な語順を示す場合が多い。特に、動詞・主語・目的語 (VSO) の語順が多い。
 - b. 大陸のラテン語統語注釈資料でも VSO の語順が示される場合が多いが、この資料がアングロ・サクソン語で読まれたとは考えられない。

Korhammer が挙げた問題点は更なる反論を呼んだ。問題点 (a) に対しては、O'Neill (1992) が、ロビンソンも挙げた、古英語の統語注釈資料であるランベス詩篇 (Lambeth Psalter)

を調査し直した結果、統語注釈がアングロ・サクソン語として自然な語順を示しているという結論に至った。問題点の (b) に対しては、Reynolds (1990) の研究が重要である。Reynolds はフランス国立図書館蔵のプリスキアヌス (Priscianus Caesariensis) 著『文法学教程』の9世紀の写本と、12世紀に南フランスで書写されたホラチウス著『詩集』の写本を調査した。どちらの写本にも語順を示すローマ字 (a, b, c...) とその他の統語注釈記号が数多く見られる。ホラチウスの写本を150行調査した結果、主節においては60中の50節は主語-主動詞-目的語 (SVO) の語順を示す。接続詞や疑問・関係代名詞に後続する節においては42節の内27がSVOで、残りはVSOが11、OVSが2、VOSが2である (Reynolds 1990: 36)。疑問文の場合には主動詞が必ず疑問代名詞に続く。Reynolds が指摘するように、このような順序は古典ラテン語ではありえないが、古オック語 (当時南フランスの口語) の語順を忠実に示すものである。

Reynolds (1990) の研究で分かるのは、欧州大陸でなされた、ラテン語原典に加えられたラテン語注釈でも、「自言語読み」を示すことが目的だった可能性が強い、ということである。なぜなら、Wright (1982, 1994) の一連の研究で示されているように、中世初期から、ロマンス系言語の地域で記されたラテン語表記はしばしば古典ラテン語ではなく、当時の原始ロマンス系諸語 (古フランス語・古スペイン語、古オック語など) を記すために使われたことが明らかである。Wright は、9世紀ごろまでには、ラテン語の原典は古フランス語、古スペイン語などの「自言語」で口頭で読まれていたと指摘しているが、「自言語」でラテン語を読む習慣は発音、活用・屈折形だけではなく、自言語の語彙をラテン語の語彙と入れ替えることまで及んでいたという。このような読み方は教会・学校・行政の各場面で行われたのであるが、漢文を中国語諸方言で「読み下す」のと等しい言語生活の一種である。Wright のこの「自言語読み」説によれば、自言語ではなく、「ラテン語」で読む習慣は、9世紀にならないと始まらない、ゲルマン系言語圏から逆輸入された、人工的な読み方であったとされる。この説では、Korhammer が挙げた、「自言語読み説」に対する問題点 (b) が解消される。ラテン語注釈資料で示された統語注釈とその他 (古アイルランド語、古英語、古ドイツ語など) の言語による注釈が類似している理由は、いずれも「自言語読み」を示しているからである。後者が当時の「自言語」 (古アイルランド語など) での読みを示すと同様、前者はロマンス系諸語 (古フランス語、古オック語など) の「自言語読み」を示すのである。

本節では、中世欧州における「国際語」であったラテン語と「自言語」であった中世各国の関係を考える場合、ラテン語原典の「自言語読み」を認める以上、原典がどう記されたかだけでなく、ラテン語の原典がどのように読まれたかという問題の重要性を指摘した。東アジアの場合は「自言語化」 (vernacularization) の度合いを測るに当たって、「漢字で書かれた」という事実だけではなく、漢字資料の読み方も考えなければならないが、訓点資料や

口訣資料の存在により、国際語であった漢語で記された漢文典が日本や韓国だけではなく、漢字文化圏全域で自言語で読まれたことは明らかである。特に興味を引くのは、Korhammer 1980 が中世欧州の統語注釈に関して指摘したように、各国の注釈の形式の間で一定の類似性が見られると同じように、訓点資料が現れ始まる 8 世紀末・9 世紀初めと口訣資料が現れ始まる 10 世紀の資料の間にも、一定の類似性が見られる次節ではその類似性について検討する。

4. 口訣資料と訓点資料の類似性と相違点—その歴史的関係をめぐって

4.1 口訣資料と訓点資料の比較

欧州の注釈資料に対する一般の学者の意識が低いのに対し、日本と韓国では訓点資料と口訣資料に対する意識が高い。口訣資料と訓点資料（より広い意味でいえば両国の訓読方法）の比較研究の出発点は藤本（1992）の研究である。その後、小林（2002）による、ソウル誠庵古書博物館蔵「大廣佛華嚴經」の角筆口訣資料の紹介と日本で伝わった佐藤本「華嚴文義要決」との比較研究がこの分野の研究を大きく刺激したが、未だ口訣資料と訓点資料を体系的に比較した研究はない。⁸ 本節では、訓点資料と口訣資料のいくつかの類似点と相違点を紹介し、この研究の出発点とも言える佐藤本「華嚴文義要決」を中心に、両資料の歴史的関係について検討する。

4.2 類似点と相違点

第 2 節では韓国の釋讀口訣と日本の訓点のいくつかの類似点を簡単に紹介した。その類似点は、略体表音漢字(字吐、仮名点)、自言語の形態論的情報を補う形態点(點吐、ヲコト点)、語順符号(返読点、漢数字など)、合符などの符号のほか、加點作業に使われた道具にまで及ぶ。両国において、最古の口訣・訓点資料は角筆によって記されたものにほぼ間違いがない。⁹ もう一つの類似点は、宗派による点法の発達である。口訣資料の場合、我々に残された資料は「華嚴經系統」（華嚴宗）と「瑜伽師地論系統」（法相宗）で點吐法が大きく分けられる。これは訓点研究で認められるヲコト点の種類が 8 つ以上であるのに比べると数は少ないが、それは口訣資料の量的制約によるためであろう。

口訣資料と訓点資料の類似性について述べてきたが、言うまでもなく相違点も少なくない。例えば、南星祐・鄭在永（1998）で分析された東国大学蔵「舊譯仁王經」（13 世紀推定）の字吐釋讀口訣を見てみると、日本の訓点資料にはない語順の表示法があることが分かる。下の例はこの資料の第 2 帳の 1-2 行目である。(10)では日本の読者にわかりやすいように字吐を元

⁸たとえば、朴鎮浩(2009)による、釋讀口訣と春日政治著『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』に見られる白点資料を総合的に比較した研究がある。

⁹第 3 節では割愛したが、中世ヨーロッパでも角筆による注釈資料(drypoint glosses)が数多く残され、1930 年代から研究されている(Meritt 1934, 1961)。

の漢字体に改めてある。

(10) 東国大学舊釋仁王經 2:1-2

- a. [清]信行乙具足爲示爾復爲隱有叱在彌五道叱一切衆生是復爲隱
有叱在彌他方叱不知是飛叱可叱爲隱量乎音衆
- b. [清]信行乙具足爲示爾復爲隱五道叱一切衆生是有叱在彌復爲隱
他方叱量乎音可叱爲隱不知是飛叱
- c. [清]信行 ㄹ 具足 hΛ-si-mjə 復 (stohΛn)五動 s 一切衆生 i 有(i)s-kjə-mjə
[清]信行 ㅍ 具足シ - タマヒーテ マタ 五動ノ 一切衆生ガ 有リ - ニ - テ
復(stohΛn) 他方s 量 h-o-m 可(ci)s hΛ-n 不(an)ti i-nΛ-s 衆有(i)s.kjə-mjə
マタ 他方ノ 量スル 可(ベカラザル) 衆生有リ - ニ - テ

(10a) では南星祐・鄭在永(1998)と鄭在永(2006)に従って原文を横書きにしたが、本文の右に加えられた字吐を上付きに、本文の左に加えられた字吐を下付きにし、字吐を下線で示した。

(10b) は南星祐・鄭在永(1998)と鄭在永(2006)に従った書き下し、つまり韓国語の語順である。(10c) は(10b)を中世韓国語にした鄭在永(2006)の解釈を転写し、和訳を加えたものである。(10a)と(10b)を見て気がつくのは、字吐が右(上付き)か左(下付き)のどちらに入れられるかによって、順読するか返読するかが示される、ということである。たとえば、1行目の「復爲隱」までは原文の語順のまま読むが、次の「有叱在彌」の字吐が左に挿入されているので、この語を次の名詞句「五道叱一切衆生是」と返読する。このような仮名点が入れた位置による返読表示は日本の訓点資料には見られないようである。

こうした表記レベルの相違はむしろ予想の範囲内である。上で見た「舊譯仁王經」は釋讀口訣の末期に近い資料で、口訣の起源から5世紀も経った後の資料であり、口訣資料と訓点資料が原始的なものであるほど類似性が見つかるのはきわめて自然だからである。

その起源に関しては、上に述べた形式上の類似点のほかに、初期資料の形態の類似点の一つ指摘されている。南豊鉉(2006: 1-2)は、新羅の釋讀口訣の起源は7世紀末に新羅華嚴經の開祖である義湘の講義を記した講義録から始まったという。原文は残されていないが、高麗時代に残された資料から、南教授はこの講義録は字吐による釋讀口訣であったという。つまり、口訣資料で最古のものは仮名点にと対応する字吐によるものであった。

同じように、春日(1956: 266)はその当時知られていた最古の訓点資料すべて仮名点という。春日はその年代順を(11)のように考えている。

- (11) a. 景雲写 根本説一切有部毘奈耶
- b. 同 根本説一切有部苾芻尼毘奈耶
- c. 同 持人菩薩經
- d. 同 央掘魔羅經
- e. 同 羅摩伽經
- f. 同 大方華嚴經

無論、これらの資料には加点年の記録はないが、春日の考えでは(11a-e)は延暦～大同期中(782～810年)の約10年の間に加点されただろうという(春日 1956: 266)。初めの4点には仮名点(真仮名)のほかに返点と句点しかない。¹⁰ 最古の資料には仮名点(字点)しかなく、ヲコト点はまだ見当たらないことは南教授の初期口訣資料に対する見解と一致する。

(11e)の「羅摩伽經」には原始的なヲコト点が見られる。春日の考えではこれが日本のヲコト点の最古例である。次の節で口訣資料の點吐と日本のヲコト点の歴史的関係の問題を取り上げ、「羅摩伽經」の重要性を改めて検討する。

4.3 口訣資料の點吐と日本のヲコト点の歴史的関係—佐藤本「華嚴文義要決」をめぐって

口訣資料の點吐と日本のヲコト点の歴史的関係をめぐっては、佐藤達次郎旧蔵本『華嚴文義要決(問答)』の重要性が日韓両国の研究者によって指摘されている。佐藤本『華嚴文義要決問答』(以下「佐藤本『要決』」)にはヲコト点(星点)を含む訓点が見られる。中田(1969: 199)はその星点について、「点法の系統は考えられないが、従来知られている点法に、ほとんど連絡のつかないものである」と指摘しているが、小林(2002)は佐藤本『要決』の点法がソウル誠庵古書博物館蔵『大廣佛華嚴經』の角筆点と似ていると述べている。金永旭(2002)は小林とほぼ同じ解釈であるが、星点が口訣の「點吐」、つまり当時の韓国語(新羅語)を記したものだとして主張している。『要決』の點吐/ヲコト点は韓国語(新羅語)を記すために加点された可能性は小林(2004)にも示唆されている。しかし金永旭(2002, 2006)も認めているように、佐藤本『要決』の星点には他の口訣資料に見られない用法がある。以来、日本と韓国の学者の間にこの資料に対する意識の隔たりが生じ、佐藤本『要決』の點吐/ヲコトを何語で読むべきかは定かではない。本節では、ホイットマン(2009)の発表論文を簡略にまとめ、8世紀末の訓点体系における日韓の交流について考察する。

4.3.1 資料

¹⁰ (11d)の「央掘魔羅經」の仮名点はすべて音読を示すものである(春日 1956: 276)。

佐藤本『要決』の原典は昭和 20 年 4 月 14 日の空襲で焼失しており、現在残っているものとしては、昭和 14 年に出版された二色のコロタイプ複製本しかない。その為、資料上の制約がある。本研究では東京大学国語研究室保管の昭和 14 年の複製本と、同じ複製本を撮影した韓国の「華嚴文義要決研究プロジェクト・チーム」(研究責任者鄭在永、以下「鄭在永チーム」)によるデジタル写真を使用した。佐藤本『要決』には、朱の星点、句切符、合符、返読符がある。¹¹ 朱点のほかに、墨筆による行切点と、やや斜めの線形の「星点」がある。

佐藤本「要決」の内題は

卷第一 五科入

(12) 華嚴文義要決 問答 皇龍寺表員集

のように、「問答」の 2 字に円が墨筆で付けられている。¹² 『要決』の日本への伝来について、小林 (2004: 187) は正倉院文書の「華嚴宗布施法定文案」の天平勝宝 3 年(751 年)の條に「(未寫) 華嚴文義要決一卷 表員師用紙十四張」という記録があることを指摘している。古写本としては、佐藤本の他に、延暦 18 年 (799 年) に書写され、延暦 21 年に黄褐色の句切点が施された延暦寺蔵『華嚴要義問答』(巻上、巻下)という題の同一本がある (小林 2004: 188)。^{13, 14} 日本に伝わった『要決』の写本に関しては、鄭在永 (2009) が詳しい。佐藤本には奥書がないが、佐藤本も延暦寺本と同じ延暦 18-21 年間頃に日本で書写、加点されたという点については諸研究者の意見が一致している (中田 1969: 193、小林 2004: 188、金永旭 2006:53)。¹⁵

佐藤本『要決』は 1 巻 507 行からなる。星点はおよそ 40 点のみである。仮名点はない。句切符、合符、返読符の他に、本文の訂正の段階で朱筆が書き入れられた漢字も見られる。

3.3.2. 佐藤本『要決』の先行研究

小林 (2002: 27) は佐藤本「要決」の星点を 6 種類に分けているが、金永旭 (2002) は更に処格を表示する点を上辺中段に加えている。両研究による点図を (図 1) の (a) と (b) に示

¹¹ これらの符号は、原典では黄色 (中田 1969: 193) か黄褐色 (小林 2004: 188) であったらしいが、複製本では朱で複製されている。

¹² 皇龍寺は新羅京州に 645 年に創立され、1238 年に蒙古襲来により廃刹となった寺である。今でもその跡が京州で見られる。「要決」の撰集者の表員に関しては韓国の仏教学者の間でも諸説あるが、新羅華嚴学の祖宗である義相の弟子だった表訓と同一人か、そうでなくても義相系の僧侶であった見方が有力のようである(金永旭 2006: 48-51)。

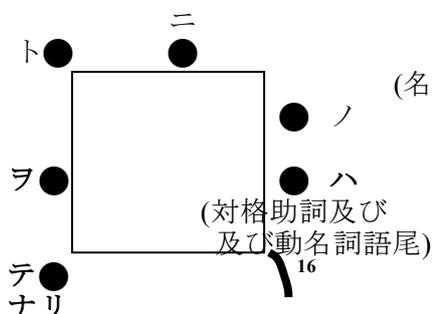
¹³ 中田 (1969: 193) は、延暦寺本が「句読を施したるものの最古の一つと目すべきものである」と述べている。

¹⁴ 延暦寺本は 2 巻あるが、佐藤本は第一巻のみである。

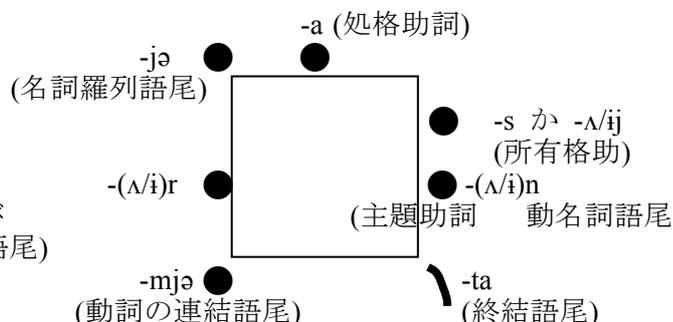
¹⁵ 金永旭 (2006: 53) は、佐藤本の墨筆による本文と朱(黄)筆による加点は同筆であると指摘している。また小林 (2004: 188) は、佐藤本と延暦寺本に見られる句切点の形式が異なることや、延暦寺本に星点がないことから、別人による加点であると指摘している。

した。

(図1) a. 小林(2004:189)による
佐藤本のヲコト点図



b. 金(2006:62)による
佐藤本の吐点図



便宜上、李 (2006:5) の訓点座標数値の形式 (13) に従って佐藤本の星点を (14) に示す。

(13)

11	12	13	14	15	16	17
21	22	23	24	25	26	27
31	32	33	34	35	36	37
41	42	43	44	45	46	47
51	52	53	54	55	56	57
61	62	63	64	65	66	67
71	72	73	74	75	76	77

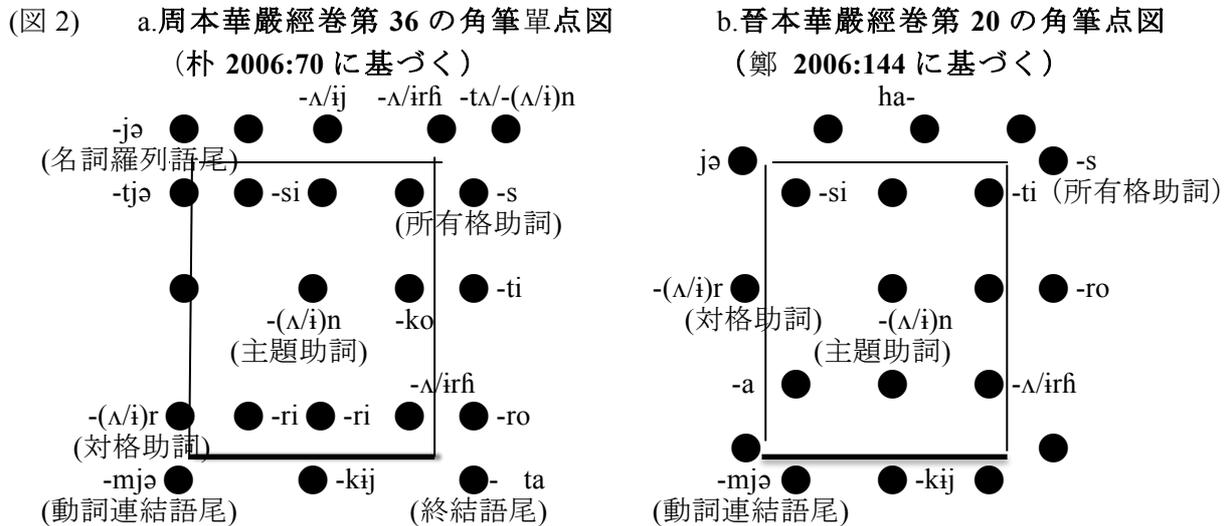
(14) 佐藤本「華巖門儀要決」の星点位置

座標数値	位置	吐点としての文法機能	音韻	対応する日本語
62	下辺左段	動詞の連結語尾	-mjə	テ
42	左辺中央	対格助詞及び動名詞語尾	-(Λ/i)r	ヲ
22	上辺左隅	名詞羅列語尾	-jə	ト
24	上辺中央	処格助詞	-a	ニ
36	右边上段	所有格助詞	-s か -Λ/ij	ノ
46	右辺中央	主題助詞	-(Λ/i)n	ハ
66	下辺右段	動詞、指定しの終結語尾	-ta	ナリ

(図1) の (a) と (b) からわかるように、ほとんどの場合、日本語としての解釈と韓国語としての解釈はよく似た文法機能を反映している。しかし日本の訓点資料には (図1a) と同じ

¹⁶指定詞「なり／-ta」を表すと思われる点は、図のようにやや長く縦か斜めになる場合が多く、星点より線点の形に近い。

点法は見当たらないのに対して、小林（2002: 28）が指摘するように、ソウル誠庵古書博物館蔵の周本「華嚴經」巻第 6, 22, 36, 57に見られる角筆点(11 世紀前半推定)とほぼ一致している。また、同じ誠庵博物館蔵の晋本『華嚴經』巻第 20 の角筆点（9-10 世紀推定）とも類似している。）（図 2）は両資料の単点図である。¹⁷



周本「華嚴經」巻第 36 の角筆単点と佐藤本の星点は次の (15) のような対応を示している。

(15) 周本華嚴經巻第 36 の角筆単点と佐藤本の星点の対応表

佐藤本		周本華嚴經 (南 2007:6 による)			
座標数值	位置	座標数值	位置	吐点としての文法機能	音韻
62	下辺左段	71	下辺左段外側	動詞の連結語尾	-mjə
42	左辺中央	51	左辺下段外側	対格助詞	-(Λ/i)r
22	上辺左隅	11	上辺左隅	名詞羅列語尾	-jə
24	上辺中央	なし			
36	右边上段	27	右边上段外側	所有格助詞	-s
46	右辺中央	44	真中	主題助詞	-(Λ/i)n
66	下辺右段	77	下辺右段外側	終結語尾(線点)	-ta

62（動詞連結語尾）、22（名詞羅列語尾）、36（所有格助詞）、66（終結形）はすべて周本『華嚴經』と一致している。主題助詞の単点は周本と晋本の点図の中央(22)にあるが、佐藤本『要決』でその点が右辺中央に移っているのは、小林（2002: 29-30）が指摘するように、角筆と

¹⁷周本「華嚴經」には単点の他、線点、双点、複星点と、複雑な點吐体系が見られる。

墨筆の資料上の違いのためであると思われる。佐藤本『要決』の星点は、時期的に近い晉本「華嚴經」巻第20の角筆点ともよく似ている。対格助詞は却って佐藤本『要決』と晉本「華嚴經」で完全に一致している。¹⁸

以上に述べた點吐/ヲコトの一致に加えて、佐藤本『要決』と周本『華嚴經』の句切符、合符、返読符との類似性については小林(2004: 190-196)が詳しく述べている。同じような点法は日本の訓点資料には見られないので、小林は「佐藤本『華嚴文義要決』が新羅の皇龍寺僧の表員の著作に基づいて本文を書写すると共に、親本に施されていた新羅のヲコト点や返読符、句切符、合符をも写した可能性が高い」(小林 2004: 190-196)と指摘している。¹⁹ 金永旭(2002, 2006)も同じ結論に達している。

4.3.3. 解釈上の問題点

4.3.2 で見たように、佐藤本『要決』の諸訓点が韓国の口訣体系から強い影響を受けたことは疑いの余地がない。しかしこの「影響」の具体性に関してはいくつかの疑問が残る。佐藤本の加点者は新羅の原典からただ機械的に口訣点を写したのか。それとも、口訣体系の点法を把握した上で、本文を日本語で読むつもりで口訣の点法を借用したのか。これ以降、「ただ写した」という見方を「移点説」、「日本語で読むために借りた」という見方を「借用説」と呼ぶことにする。

もし「移点説」が正しければ、口訣資料としては読めても日本の訓点資料としては読むことが困難な部分が佐藤本に出てきても不思議ではない。逆に、「借用説」が正しければ、日本の訓点資料としては読めるが口訣としては読めない部分が出てくる可能性がある。この点に注目した先行研究として、李丞宰(2006)が京都国立博物館蔵「華嚴經」巻第17のヲコト点を研究している。この資料には口訣文字が含まれ、ヲコト点が属する特殊点乙類も口訣資料のものとの類似性を示していると言われている(小林2002: 35-36)。しかし李丞宰(2006: 9, 15-16)は、ヲコト点が表す文法現象を指摘し、この資料は日本語を記したものであり韓国語を記したものではないという証拠をあげている。同様に、「借用説」を支持する文法現象が佐藤本『要決』にあることを次の4.3.4~8で見えていく。

4.3.4. 下辺右段(66)終結語尾～指定詞/-ta/、ナリ

佐藤本『要決』の星点の大部分は韓国語としても日本語としても読むことができる。「下辺右段(66)」の多くもそうである。この点は12例ある。点の形はやや縦に長く、線点に近い場合

¹⁸金永旭(2002, 2006)の研究では『要決』の星点 24(上辺中央)は処格助詞/-a/と解釈されるが、周・晉本「華嚴經」の単点に/-a/と読まれるものはない。

¹⁹小林(2004: 193)は、佐藤本『要決』に見られる漢数字による反読法は、大東急記念文庫蔵の「華嚴刊定記」巻第5にも見られると指摘している。「華嚴刊定記」については、月本(2000)、呉美寧・金星周(2007)を参照。

が多い。²⁰ この点の文法的機能を日本語で考えれば指定詞「ナリ」である。金永旭(2002, 2006)の分析では動詞の終結語尾/-ta/とされる。終結語尾/-ta/は、15世紀の中世韓国語の文法では、動詞に連結する語尾である。繫辞は/-ra/, /-ira/, /-ta/, /-ita/の形で現れ、/-i-/は語末の母音の後ろで脱落する。従って「名詞+/-ta/」は「名詞+繫辞の終結形」と解釈される。ただし、周本「華嚴經」に現れる終結語尾を表す點吐/-ta/の分布を調べてみると、この點吐は「名詞+繫辞の終結形」よりも、一般動詞の終結形を表示するのに使われることが圧倒的に多い。²¹ 佐藤本『要決』に見られる「下辺右段(66)」の点はすべて指定詞を表示するために使われる。移点説の立場をとるならば、この違いを説明する必要があるだろう。

(16)の下線を引いた文は両言語で解読できる例である。

(16) 説十法地門一品／六卷(j66)十他品第 2 六 (074-075 行)

a. 韓国語： 一品六卷-ta.

b. 日本語： 一品六卷ナリ。

韓国語の解釈は「一品（主語）六卷（繫辞）-ta（終結語尾）」である。日本語の解釈は「一品（主語）六卷ナリ（指定詞の終止形）」である。

(16) のような例の他に、金永旭(2002: 62, 2006: 57-58)は次の例(17)にも注目している。この例には「下辺右段(66)」の点の他に、主題助詞を表示する「右辺中央(46)」の星点もある。

(17) 何故菩提／流支云前之五會(・46)是仏成道初七日説(j66)第六／ (149-150 行)

會(・46)後是第二七日説(j66)耶問²²法蔵師云此解不可 (151 行)

金永旭が指摘するように、「何故... 耶」は疑問文である。中世韓国語において終結語尾/-ta/は疑問の終助詞の前に現れないが、/-ta/単独の疑問文終結法はあったため、151 行では「耶」を不読字にして/-ta/で疑問文を表示した可能性も考えられる。ただしここで問題となるのが、前の 150 行に「下辺右段(66)」の点がもう 1 つあることである。「何故菩提／流支云前之五會(・46)」と「第六會(・46)後是第二七日説(j66)耶」は 2 つの、単独の疑問文ではなく、1 つの疑問文である。「菩提流支云わく」と読み、その後を間接疑問文と読んで (j66) を「ナリ」と読

²⁰この点の形も口訣資料との関係を裏付ける特徴である。周本『華嚴經』巻第 36 の角筆点では、線点の(j77)(下辺右段外側)は動詞の終結語尾を表示するために使われるが、単点(星点)の(・77)は終結語尾と関係のない音節、例えば副詞/mata/「毎、毎に」の第 2 音節を表示するために使われる。佐藤本『要決』と口訣資料は 77 に線点を使っているという点で一致する。

²¹周本『華嚴經』巻第 36 の點吐(j77)(下辺右段外側)が繫辞の終結形を表示する場合、語尾/-ta/だけではなく、繫辞の/-i/も表記するようである。例えば周本『華嚴經』36, 03.11-12 では、「故+繫辞」が「故 24(i), 55(/)」となり、音韻的に解釈すれば「故 i-ta」と表示されている(李丞宰 2006: 155)。

²²延曆寺本では「問」は「答」となっている(鄭在永チーム 2009: 注 377)。

めば日本語としては問題がないだろう。²³

- (18) 何故[か]菩提／流支云[ふ]前之五會ハ是仏成道初七日説ナリ第六／ (149-150 行)
會ハ後是第二七日説ナリ(耶) (151 行)

それに対して、(166) を韓国語の終結語尾/-ta/と解釈すれば、単独の疑問文の解釈が成り立たない。鄭在永チーム(2009: 注 374)もこの問題に注目しており、(151 行の「下辺右段(66)」を)「終結とみて解釈したが文脈では連結と見た方が良いでしょうである」(筆者訳)と述べている。この場合には、日本語としての読み下しが自然といわなければならない。

4.3.5 下辺左段 (・62) 動詞の連結語尾/-mjə/、テ

小林 (2002, 2006:189) は連用形を受ける「テ」として次の例 (19) をあげている。

- (19) 答有二義一義／者為下方衆生。於无盡説中略取_レ此等結集流／ (187-188 行)
通故有此部令(・62)其見聞。方便引(・42)入_レ无际限中²⁴ (189 行)

「令(・62)其」は日本語としては「其[レヲシ]テ... シム」と読まれるであろう。金永旭 (2002, 2006: 59) はこの点を「左辺中央 42」と見て動名詞の語尾/-(Λ/i)r/の連結用法として解釈しているが、他に(・62)の例はこの資料に見られないので、点の位置に関しては判断し難い。²⁵

15 世紀の中世韓国語のハングル資料には、漢文の使役文における「使／令＋名詞＋動詞」を「名詞-Λ/ir (対格助詞)＋ hΛjakom (スラク)」または「名詞-Λ/ir (対格助詞)＋hΛjə (シテ)」と訳す用法がある。後者の構造は日本語の「名詞ヲシテ... 動詞＋シム」と同じである。動名詞語尾/-(Λ/i)r/を使った同じような構造が 8 世紀の韓国語にあった可能性は排除できないが、はっきりした根拠はない。²⁶ この場合も、日本語として読んだ方が自然だろう。

4.3.6 左辺中央 (42) 対格助詞及び動名詞語尾 /-(Λ/i)r/、ヲ

²³ 口訣資料にも、間接疑問文を倒置させて読み下す習わしがあったようである。李丞宰(2006: 32)は「瑜伽師地論」(點吐 13 世紀推定)の例「問何故建立三種欲生三種樂生耶」をあげ、「問はく何故に三種欲生と三種樂生を建立するかといふ」と読まれたと述べている。

²⁴ これは法蔵の「華嚴經旨歸」からの引用である。原典は「答為下劣眾生。於無盡説中。略取此等結集流通故。有此一部。令其見聞方便。引入無際限中。」である。(中華電子佛典協會(CBETA) 2006: T45n1871_p0590c13(04)-T45n1871_p0590c14(01)。佐藤本『要訣』の合符「方便(→42)引」はこれと合わない。

²⁵ 金 (2002, 2006: 58) は 257-8 行の「在_レ／我身(内)の「在」字に「左辺中央(42)」の星点があると述べているが、鄭在永チーム (2009) はそれを認めていない。筆者が複製本を見る限りでは、漢数字の「二」以外にこの「在」字には点がない。

²⁶ 鄭在永チーム (2009: 注 483) は、この 189 行の「(・62)令」を連結語尾と解釈して、現代語訳では /hajəkim/ 「すらく」と訳している。

小林 (2002, 2004) も金永旭 (2002, 2006) も次の (20) の例に見られる星点を「左辺中央 (42)」と解釈している。この点は日本語では対格助詞「ヲ」となり、韓国語では同じく対格助詞の /-(Λ/i)r/ または動名詞語尾の -(Λ/i)r となる。

(20) 證處。同遍法界設於東方證法表處。彼有_レ舍 / (125 行)

那還(・42)有東方而來作證 (126 行)

小林 (2004: 189) はこの点を「ヲ」と解釈している。一方、金永旭 (2006: 60) は次のように述べている。「ここで「還」は副詞的に解釈される。「還」の左辺中央の點吐は目的格助詞ではない。動名詞語尾と見ることも難しい。そうするともしかするとこれは末音添記と関連があるのではないかと考えられる」(筆者訳)。さらに、金永旭はこの場合の「還」を中世韓国語または現代語の副詞 /toro/ 「再び」と比較している。²⁷

日本語の訓点資料には「以還」を「コノカタヲバ」と読む例 (大坪 1981: 101) や、「還」を「コノカタ」と読む例 (築島 2007: 351) がある。更に、字は異なるが「以来」を「(コノカタ)ヲ」と読む例もある (築島 2007: 350)。従って「コノカタヲ」という副詞的表現が訓点語には存在していたことが分かる。これと似た用法は上代語にも見つかる。

(21) [大御足跡を見に来る人の去にし加多] 千世の罪さへ滅ぶとぞいふ (仏足石歌)

この例では、「カタ」は前の連体節を受けて、「大御足跡を見に来る人の去った後／以来」のように、時間的副詞の意味を持っている。上代語の資料に見られる用法であることから、外来の用法でないことが分かる。このように考えると (20) は (22) のように日本語で解釈することが可能である。

(22) 彼[ニ]有[る]レ_レ舍 / 那還ヲ有(リテ)東方(而)來(テ)作證(す)。

4.3.7 上辺左隅(22) 名詞羅列語尾 /-jə/、ト

名詞羅列の形態素を表すと思われる「上辺左隅 (22)」の星点は 8 点ある。このうち、韓国語の /-jə/ (名詞羅列語尾) または日本語の「ト」と読むことができる名詞羅列の形態素が 7 点

²⁷副詞 /toro/ は動詞 /torΛ- ~ toro-/ 「回す、方向を変える」から派生したと考えられる。金永旭(2006: 60)は 126 行の「還(・42)」について二通りの解釈を持っている。一つは(・42)の点が他動詞 /tor-/ 「回る」の語幹末音添記であるという可能性である。もう一つは(・42)の点か動名詞語尾 /-(Λ/i)r/ を表示する可能性である。いずれの形も文献には現れない。更に金永旭 (2006: 60) は「しかし諺文で /tor-ta/ (発表者: 「回る」) は凡そ「轉」に対応するため解釈に躊躇せざるを得ない。これについては今後の研究を期待するのみである」(筆者訳)と述べている。

ある。この7点はすべて2点か3点の組み合わせで現れる。²⁸ 次の(23)がその1例である。

仏菩薩

(23) 問慧苑云此經者／或仏自説或菩薩説或明光中説或神(・22) (272—273行)

天(・22)等 種々類／説何故今此唯稱佛耶 (273-274行)

下線の「神(・22)天(・22)」は日本語では「神ト天ト」と読まれ、韓国語では「神-jə 天-jə」と読まれると考えられる(小林 2004: 189、金永旭 2006: 60-61)。

ところが、名詞羅列として解釈できない例が1例ある。

(24) 答此／並末教機異宣_レ聞各(別故致(・22)不同。 (177—178行)

本教機定。故／唯七二。 (178—179行)

金永旭(2006: 61)は178行の例について次のように述べている。「178行の場合は他の用例と使い方が異なり、我々の興味を引く。関連文脈は「機異宣聞各別故致(・22)不同」なので、解釈しようとするれば「機(根機)が異なって当然聞くこともそれぞれ違う故に同じでないに至る」である。この時の「致」は述語として使用され、文章の種類としては平叙形に相当する(筆者訳)。²⁹ しかしこの解釈には問題がある。「致(・22)不同」の頭に立つ字は「至」ではなく「致」である。「華嚴問義要決」で「至る」(韓国語이르다 irita)の意味では「至」が使われる。延暦寺本も「致」となっているため、誤字ではないことがわかる。

日本の訓点資料には「致」を「致サク」(致サクノミトノタマフ)、「致サマク」または「致スコト」などの訓読例がある(築島 2007: 387-392)。特に後者の解釈であれば、「致(・22)」が加点者によって比較の対象と解釈されたとも考えられる。そうであれば「致[すこと]ト不同[しから]と読まれた可能性があるだろう。

4.3.8 右辺中央(46)主体助詞及び動名詞語尾 /-(Λ/i)n/、ハ

佐藤本『要決』には、「右辺中央(46)」の星点が11例ある。その多くが韓国語にも日本語にも通じる、名詞句に後続する主題助詞の用法である。

(25) 第一會(・46)為九會之最初故 (136行)

²⁸具体的に内訳を述べると、273行の例に「上辺左隅(42)」の星点が2点、378行の例に2点、378行の例に2点、401の例に3点ある。178行の例だけは1点のみである。

²⁹ここで金永旭(2006: 61, 注40)は南豊鉉(2002)を根拠に、語尾/-jə/が動詞述語の平叙形に使われる例は新羅口訣では他に見られないと述べている。

ところが、1例だけは名詞に後続しない。次の(26)はその例である。

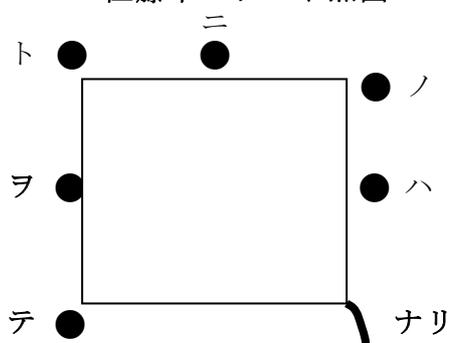
(26) 故依(・46)法花三七日四分律六七日興起行經七七日依・五分律八七日(176行)

(26) (176行)の「依(・46)」は主題助詞としては解釈し難いが、日本語で解釈した場合、仮定条件節の語尾「ハ」(「バ」と読むことは可能であろう。そうであれば「法花[に]依[りていは]バ三七日...五分律に依[りていは]バ八七日」という読み下しになる。これに対して、金永旭(2006: 54-55)はこの星点を動名詞語尾 $-(\Lambda/i)n$ の連結用法として分析しているが、「これまで新羅口訣文法に $-(\Lambda/i)n$ が連結語尾であった報告はない」(金永旭 2002: 58)と指摘している。

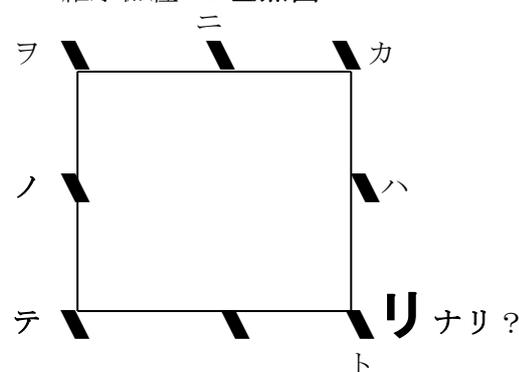
4.4 佐藤本「要決」の星点の系譜

先行研究では佐藤本『要決』の星点は他の日本の訓点資料には見られないと言われているが、佐藤本『要決』の点図(図1a)は、春日(1956)と築島(1996a, b)による神護景雲2年(768年)の「羅摩伽経」のヲコト点図とは類似性を示している。次の(図3b)は築島(1996b: 417)による。

(図3) a. 小林(2004:189)による
佐藤本のヲコト点図



b. 築島裕(1996b:417)による
羅摩伽経の吐点図



佐藤本『要決』と神護羅景雲2年書写の「羅摩伽経」とでは「テ」「ニ」「ハ」「ナリ」の位置が同じであるが、「羅摩伽経」では「ヲ」が上辺に上がり、「ノ」と「ト」の位置が異なる。神護羅景雲2年書写の「羅摩伽経」は、築島(1996a)で特殊点甲類に分類されている。特殊点甲類に関して築島は「謂はばどの群にも屬し得ないものを寄せ集めて一纏めとしたといふ感がないでもないが「特殊点甲類」は、各点ごとに個別的で相互に關聯が見られないだけに、却って「特殊点乙類」よりも古い形態を示すのではないかと考え、敢へて各群の最初に位置せしめたのである」と述べている。また、「最も重要な点と考えられる「テ」の星点の位置を

見るに」といい、築島は神護羅景雲 2 年書写の「羅摩伽經」を含む特殊點甲群の 4 つの資料で「テ」の星点が左下にあることが第 1・2・5・6 群点と同じであると指摘している。この特徴においては佐藤本「要決」も同じである。

4.5 まとめ—佐藤本「華嚴門義要決」と仏教漢文の自言語読みをめぐる交流

以上、佐藤本『華嚴門義要決』の資料を紹介してきた。この資料の原本は、新羅の僧侶が新羅で撰集した華嚴宗の仏教漢文であり、8 世紀に大量の華嚴宗関係の仏典とともに日本へ伝搬したものである。小林芳規（2002、2004、2008）が指摘したように、このような資料を媒体として、漢文の自言語読みの技術（ヲコト点・返読点・句読点）のいくつかは、華嚴宗が国家仏教の基盤になっていた 8 世紀の新羅と日本の間に伝わり、日本の訓点の一流流になった可能性が大きい。この資料に見られる点法は明らかに朝鮮に由来するものであるが、上で議論したように、加点された漢文は日本語で読まれた可能性が高い。

そもそも、佐藤本『華嚴門義要決』のヲコト点／點吐資料は日本語、あるいは韓国語だけで読むために加点されたという主張自体に問題があるかもしれない。すでに述べたように、日本語と韓国語の助詞・助動詞・語尾などには文法・形態論的平行性が高い。1 つの符号(ヲコト点、返り点など)がどちらの言語にも使われる場合が多い。8 世紀半ばから始まった華嚴宗の経典と注釈書の伝来の過程には日韓語の 2 カ国語話者が関わったに違いない。「華嚴文義要決」の加点者がそのような 2 カ国語話者であったとすれば、日韓両語で読むことを前提として加点した可能性もある。

もし口訣の點吐から影響を受けて日本のヲコト点が生じたという説が正しければ、ある歴史的段階において、點吐の「借用」、つまり「點吐を理解した上で點吐体系を借りて日本語に用いた」という出来事があったはずである。本節では、佐藤本「要決」にこのような「借用」があった可能性について考察した。

5. 「Cosmopolitan」と「Vernacular」の再検討

本稿では筆記言語としての cosmopolitan language「国際語」と vernacular language「自言語」の関係について検討してきた。世界言語と自言語の対立は一次元的ではなく、文字体系、表記言語、そして読み下す言語からなる、三次元的対立である。文字体系と表記言語が世界言語による場合でも、読み下す言語が自言語である例は、韓国の口訣資料と日本の訓点資料に限られたものではなく、中世欧州にも類似する例が見られることを述べてきた。

中世欧州の場合、注釈資料、特に統語注釈資料の分類が日本や韓国のように発達していないため、その分類と言語・地域間の歴史的関係は未だ明らかにはなっていない。しかし、韓国と日本の形態的符号である點吐とヲコト点の場合は、符号体系が華嚴經点とともに朝鮮半

島から日本列島へ渡ってきた可能性がある。略体漢字(片仮名)を含む訓点のほかの要素も、同様に日韓の古代文字・言語交流の産物であるかどうかは今後の研究を俟たねばならない。

参考文献

- 정소연 (鄭昭連). 2011. 국어의양층언어성(diglossia)을 중심으로 본 송강 정철의 한시와 시조 비교연구. 『한국학연구』 38, 385-422.
- 中華電子佛典協會(CBETA). 2006. 「大正新脩大藏經 第四十五冊 No. 1871 《華嚴經旨歸》」. http://w3.cbeta.org/result/normal/T45/1871_001.htm.
- 정재영(鄭在永). 2005. 「韓國의 口訣」 石塚晴通教授退職記念會編 『日本学・敦厚学・漢文訓読の新展開』, 582-608. 東京: 汲古書院.
- 정재영(鄭在永). 2006. 「韓國의 口訣」 『口訣研究』 17, 125-185.
- 정재영(鄭在永). 2009. 「『華嚴文儀要訣問答』에 대한 文獻學的 研究」 『口訣研究』 23, 31-65.
- Draak, Maartje. 1957. Construe marks in Hiberno-Latin manuscripts”. *Mededelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van 'Wetenschappen, afd. Letterkunde, new ser.* 20, 261-282..
- 藤本幸夫 . 1992. 「李朝訓読攷其一 文献を檢索」. 『朝鮮學報』 143, 109-218.
- 春日政治.1956. 『古訓点の研究』 東京:風間書房.
- 김영욱(金永旭). 2002. 「佐藤本華嚴文儀要訣의 國語學的研究」 『口訣研究』 10, 47-76.
- 김영욱(金永旭).2006. 「佐藤本華嚴文儀要訣의 新羅時代點吐研究」 李丞宰外 『角筆口訣의 解讀과 翻譯』 47-68, 서울: 대학사.
- 金文京.2010. 『漢文と東アジア』. 東京: 岩波書店.
- King, Ross. 2006. Korean *kugyŏl* writing and the problem of vernacularization in the Sinitic sphere. Paper presented at the Association for Asian Studies, Boston, MA. March 2007.
- 小林芳規(2002) 「韓國의 角筆点と日本の古訓点との關係」 『口訣研究』 8, 50-76.
- 小林芳規(2004) 『角筆研究導論・上(卷東アジア篇)』 東京: 汲古書院.
- 小林芳規(2006) 「日本語の訓点の 一源流」 『汲古』 59, 1-19.
- Korhammer, Michael 1980. Mittelalterliche Konstruktionshilfen und altenglische Wortstellung. *Scriptorium* 34: 18-58.
- Kornicki, Peter. 2014. The vernacularization of Buddhist texts: From the Tangut empire to Japan. In Elman, Benjamin (ed.) *Rethinking East Asian languages, vernaculars, and literacies, 1000-1919*. Sinica Leidensia 115, 29-57. Leiden: Brill.
- Mair, Victor. 1994. Buddhism and the rise of the written vernacular in East Asia: The making of national languages. *Journal of Asian Studies* 53.3, 707-751.
- Meritt, Herbert. 1934. Old High German scratched glosses. *The American Journal of Philology* 55.3, 227-235.
- Meritt, Herbert. 1961. Old English glosses, mostly dry-point. *Journal of English and Germanic Philology* 60, 441-450.
- 中田祝夫. 1969. 『東大寺諷誦文稿の國語學的研究』 東京: 風間書房.
- 남성우(南星祐), 정재영(鄭在永). 1998. 「舊譯仁王經 釋讀口訣의 表記法과 한글 轉寫」 『口訣研究』 3, 195-251.
- 남풍현(南豊鉉). 2002. 「新羅時代口訣의 再構를 위하여」 『口訣研究』 8, 77-93.
- 남풍현(南豊鉉). 2006. 「韓國의 古代口訣資料와 그 變遷에 대하여」 임용기, 홍윤표편 『국어사 연구 어디까지 와 있는가』, 615-638. 서울: 대학사.
- 남풍현(南豊鉉). 2007. 「韓國口訣讀法」 Association for Asian Studies での發表. 米 国ボストン 3 月 23 日남풍현(南豊鉉). 2006. 「韓國의 古代口訣資料와 그 變遷에 대하여」 임용기, 홍윤표편 『국어사 연구 어디까지 와 있는가』, 615-638. 서울: 대학사.
- 남풍현(南豊鉉). 2009. 「韓國語史研究における口訣資料の寄与について」 『訓点語と訓点資料』 123, 122-114.

- O'Neil, Patrick. 1992. Syntactical Glosses in the Lambeth Psalter and the Reading of the Old English Interlinear Translation as Sentences. *Scriptorium* 46, 250-56.
- 吳美寧・金星周(2007)「大東急記念文庫蔵『華嚴刊定期』について」『訓点語と訓点資料』119.
- 박진호(朴鎭浩). 2006. 「周本『華嚴經』卷第 36 點吐口訣의 解讀」李丞宰外『角筆口訣의 解讀과 翻譯 2—周本『華嚴經』卷第三十六—』69-98. 서울: 태학사.
- 朴鎭浩. 2009. 「韓國の点吐口訣の読法について—春日政治『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』との対比を通じて—」. 『訓点語と訓点資料』123,10-19.
- Pollock, Sheldon. 1998. The cosmopolitan vernacular. *Journal of Asian Studies* 57(1): 6-37.
- Pollock, Sheldon. 2000. Cosmopolitan and vernacular in history. *Public culture* 12(3): 591-625.
- Pollock, Sheldon. 2003. Introduction. In Pollock, Sheldon (ed.) *Literary Cultures in History: Reconstructions from South Asia*. Berkeley: University of California Press, 1-36.
- Robinson, Fred C. 1973. Syntactical glosses in Latin manuscripts of Anglo-Saxon provenance. *Speculum* 48(3): 443-475.
- Reynolds, Suzanne. 1990. *Ad auctorum expositionem: Syntactic theory and interpretive practice in the twelfth century*. *Histoire Épistémologie Langage* 12.2, 31-51.
- 庄垣内正広. 2012. 「ウイグル語漢字音と漢文訓読」麗澤大学言語研究センター編『日・韓訓読シンポジウム—平成 21 年～平成 23 年 開催報告書—』柏市: 麗澤大学言語研究センター, 199-222.
- Steinmeyer, Elias & Sievers, Eduard. 1879-1922. *Die althochdeutschen Glossen*. 5 vols. Berlin: Weidmann.
- Stokes, Whitley. 1887. *The Old-Irish glosses at Würzburg and Carlsruhe. Part I, The Glosses and translation*. London: Philological Society of London & Cambridge.
- Sweet, Henry. 1885. *The oldest English texts*. Oxford: Oxford University Press. (Early English Text Society no. 83, reprinted 1957.)
- 築島裕.1996a. 『平安時代訓点本論考』東京: 汲古書院.
- 築島裕.1996b. 『平安時代訓点本論考・ヲコト点仮名字体表』東京: 汲古書院.
- 築島裕.2007. 『訓点語彙集成』(第 2 卷う～か)東京: 汲古書院.
- 月本雅幸.2000. 「大東急記念文庫蔵続華嚴經略疏刊定記卷第五の訓点について」鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究』第 23 輯. 東京:武蔵野書院.
- ホイットマン・ジョン. 2009. 「口訣資料と訓点資料の接点—佐藤本『華嚴文義要決』のヲコト点/點吐を中心に」. 訓点語学会第 100 回研究発表会. 京大会館.
- Wieland, Gernot. 1983. *The Latin glosses on Arator and Prudentius in Cambridge University Library MS GG. 5. 35. Studies and Texts*, 61. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Wright, Roger. 1982. Late Latin and Early Romance in Spain and Carolingian France, Liverpool: Francis Cairns.
- Wright, Roger. 1994. Logographic script and assumptions of literacy in Tenth-Century Spain. In: Mair Parry et al. (eds). *The Changing Voices of Europe*. Cardiff: University of Wales Press.
- 李丞宰. 2006. 「京都国立博物館蔵の『華嚴經』卷 17 の訓点」『訓点語と訓点資料』117, 1-17.
- 이승재(李丞宰). 2006. 「符點口訣의 記入位置에 대하여」. 李丞宰外『角筆口訣의 解讀과 翻譯 2—周本『華嚴經』卷第三十六—』13-45. 서울: 태학사.
- 이승재(李丞宰)外. 2005-2009. 『角筆口訣의 解讀과 翻譯』1-5. 서울: 태학사.